春庭家集

へ 4
2260

家集

本居春庭

年のうちに春立ける日よめる

今朝はまた雪ふりしきる年のうちをこめて立霞かな

早春氷

山川やこほり吹とく春風にまつ咲花の波のはつ花

鶯の声とはぬほとによみてやりける

あらたまの春くることに立かへりかはらての松ちよをかさねよ

霞中帰雁

おし秋の雲井の雁もかすみに見えてかへるかりかね

志たし(?)こゝろを哀(?)ゆる春の哀れを(?)わかれしてより一はふ(?)

夕落花

人め見る花のさかりも過るよりハちらし清き春の夕くれ

霞隔遠樹

春きても面影たちに山の松見えなく迄中にゐる霞哉

落花

終日ひて散はさのよの空に花の色見えてかはらぬ

山花

初瀬山木の花さかり見てそあてにかすむひはるに春風そふく

むのうら

さくも花に咲てそ世をね面影をたてゝいくかのみよ船の方

梅花随につゝき春風と袖のにほひを移てそなりけり

まてまさくむのいろきてむねへき清きのうち山に春の山色

あるなりと見ふなくて散るをもむさくらあかねこそ後のあまり梅ん

梅風

谷とえねよその手おひをふりかへておもり北風よりの小梅のえ

梅花

梅花さける垣ね星見てはひそわたる閑風

咲ねとハ春ね梅も吹風のたよりにつゝむゆくらめの色

夕梅

梅花とハ夕くれ時にもはよりあはれてかよふ夕風

山ふ風のおちねたみまち立くれて月もかゝりふそてに梅の色

暁梅

梅の色も月のひかりもこかりふ哀そふかきあかつきのころ

山寒月

山ふかみ雪をふみて春北秋のなにひとつ月のかけ

江路梅

ちりかゝりて花の下陰たつときてもまたみはなれぬ袖の梅か
かるそてわかぬ梅とかへり見る旅衣袖まてかくしかたみ梅かゝ

野径

帰るさも桜わけゆくや宮こ人霞をしふ袖への夕くれ

花似雲

かつらきし高根のさくらかつらみえて又雲かとてわきまよひける
雲とみえまかふさくら吉野山それかいりて花とみるらん

里款冬

花散し跡のゆくへを尋ぬれは里わかぬまてのこる山吹
身かよひていかねほまて咲にけるしのふの里の山吹の花

山家落花

とはれすもまたすむ山さとの桜さきしとや花のちるらん

名所花

咲花を人のこゝろにまかせて三吉野の山霞むひたすら春風そ吹

山花

春霞たつ野の山の峯もはるかし花のさかりをまちつくるらむ

花

花さかりや霞吹こす山風に色もかはらぬ雪の花ちる

柳靡風

白妙のむかふ眉もなひくなひく春風にしなる春の柳の糸

惜落花

花のみなちりなそとよける桜木もをしむ心はおのかのこなり
花の家河をちかよりなる中に
桜かり山路にかくれぬるとやよし野の花の下かけ

右近衛中将

高砂のをのへの桜見えてねぬまてや山のふもときまかすみかな

花の歌

行てみぬ人もしのへや桜花の面影見するみ山のしらくも

春雨

春さめハ降るとはなしに梅ひさし久しく重ね春雨のそら

落花

吹まよふ嵐や花をさそふらん白雲さそふ松の木の下

初春霞

あら玉の年とゆきかへる春のころハ霞のころもきてかすみ哉

春夜

春の夜の霞の色に春雨もはるとはなしにかすむ月かな

梅風

かきよせし袖の匂ひに梅か香のかほる春風

梅薫風

月影にうつる夜半の梅か香につれて匂ひの春風

河辺古柳

春のいろはせかれける花かけの川辺にて春霞ぬる青柳の糸

水辺柳

春雨に淀の川辺の青柳のなかにてみえしうきは春柳

雨中待花

春雨に春の花のひらけてきぬらし桜の花を待ちて

山花

さくらとなるそれからとも見えし山花にたかねの春を見むかな

桜花

桜花雪とゆきまよふ花かてもまちいはみ山の春風

花のうつろひ

春深くかすむ山の桜にけりはのうへに見ゆる花のしたかな

風ふけハ花もちりゆくみの山をとへとても

待わひる人はくしも山さくら咲かしかれる花のいろいろ
山さくらさけるさかさる所もあれやあらしかのかせ

関花

様人のうさもなつけむ花の枝に風なゆるしそ逢坂の関

春山花

山ふかみ世にしられぬたにしに山風かをる山の志らくも

落花

きえふへしさ稲の雲もよし野山のみるさくら花の白雪
花のふるも見はり庭のさかり花ちる山風に雪とみつて
雪とはしきのふの花やよしの山にふる春の雪けなからん

夜思落花

よるも猶心みるれてちる花の面影にゆる夢のたまくら

暮春

暮月惜しむとゆる春の所とゝめきふつむ人おしみきく初瀬の山の鐘

暮の鐘

わさみせとり悲しの花けし花のかすむよりとも小さいつる旅人かな
まふうき柳さへ水文をまつ旅の恋人のゆ花のむくきく

待雨中花

さひしさと花まつ宿にわきくれて咲ぬとたのむ春雨のそら

花

咲そむる花を雲かとみるよりおもあやまたれぬるかな山ふき

落花

雪とふつりふハちるもよしの山河にしはなかふ花そつれなき

水上落花

ちりかかる水の流に紛へてわかしまう流る花の筏か所

山吹

りまぜせてまでてや吹乃花さ紀かゝる井手の山吹志らくみ

松上藤

浪みせとりこしくすくなれにうち波の花まかゝるいる松ヶ枝

帰雁

見すれとる越路の秋もかへるなれいかゝしやおりし旅の空

梅移水

花の色香も影見えて春風にうつりてすゝふ梅の志らなみ

海辺帰雁

まちこひし待もたるゝふたゝものゝつるのた海鳥かへるかの道

山霞

山流とおへふる雪まも立そめてかすむ時しる山の志らなみ

春曙

花鳥も一夜へたてゝ朝霧又たへつらしきあけかゝめくそら

山家鶯

うつろをそたけや鶯花の色に鶴もおなし春の山里

うくひすの声うちそふるなかそらにふる山の庵の雪のむらきえ

鶯

よそにきくねをハ霞の内にすこし鳴てとくる谷の鶯

若菜

おそくときこのめさしなれて春もちくさの雪に若菜

小浦朝通のき浜の松和歌山にかへりあさに

よみて浜かへしける

かへりアの宮ハまをふこそ紀の路に帰る名残としる也

梅薫袖

さそひくる風もうつる花の色にわか袖さそあまたの梅かえ

浜をひ来ておの道すきれ神めくへ香にほひして梅の花風

よそながらうつる社よ　西新をゆる風の梢かな

春のこゝろ

手折るゝのどやこゝに鶯の鳴てうつるも花の枝かな

三浦宮　渓又春来むとて志ほれの初つかた

わか山またかへるとしき

椽の鶯と家まにかへりたちかへりこゝも春の路を

鶯

われとけさ鐵一しほそえて浅ことりかすめる聲へ鶯ぞなく

雪ふかき谷の戸いでし鶯のかへるみちは花ぞ教しく

花

花さかりいもそふまかに見て霞まやとかるゝよしみく山

ふもとしるきのあらし風も袖にをきたる岩の花の色

かりがねうちにきこ花の浪にまきて日数かさぬる春のやまかぜ

咲きまるもちかすかれて然嵐香しくたるみすしぬ

うちよはるいそぐさゝ吹ふれたるみの花さく白ふぶき風

惜落花

桜花ちりかひくもる路にとしむところゆく方もなき

水上花

みなもと川ありそ川瀬も見ぬ匠春をふかみて立つ泉の

谷鶯

なる春みひかりそむる谷にしもなきそゝむる鶯の声

梅移水

花とみてをられぬ春の川水もぬるくたまれはまみに梅の花

庭上梅

さかぬとて見ぬ人もなき庭の香ぞさそふみの梅のちる色

野外霞

かすか野やうつろし見ハきえて又霞よこをも見ゆ草のわかくさ

旅宿梅

うき旅のかり寝にかをるむ花のかも一夜ならぬ梅乃木のもと

暮山花

くれかゝる風も吹ひてよしの山ゆふかけて花のかこそ

花

よしの山むかしを今にさそふ花見えてちるさくらかな

花月

くれふかき花の霞に山の端もわかるゝまてにかすむ月かけ

帰雁

花のなをゝしうつさてゆく雁もかへるみちにまよふらん

花

見ひ庭にかすみ花もちそひれてちるらむ此春のかせひち
花もまこと何となるものゝあはれにうつろふ人の心ろ
さけハちる花のさこの花をきそ見なれハあた此山のふもとに
すみよの三月にはるゝねてかすみもなくちるさくらかな
いとく世のうき人を見せてきくさそひぬるも散るさくら
咲風にあらすはひとゝふ花にとはるゝるそいかて
とりもそてそめしんのそてにゝまつかふる色にてそい咲こき
風よりみやかふ霞乃そてにちりける
むさをふる枝を出るもみまゝかはちゝちるの夜の月
すそのひねてそうき世をちる花のゆくへ世のはかなきも
さかつて枝にあいふ絶見てて心ちりかゝる花の木のもと
たちよれハなれしみなれなひあへ見をふる雁の花の下陰
ひとさかりありて乃後も庭の雪ならぬ花そふるゆき

さくら花月よりみる桜の大宮をかりふ霞の袖もうらやまし
よしの川よしの桜の色見えて雲のなかにちるとくらしかし
さけはまた人めまれて花盛かたらぬ春の山まちて
咲花のなけき人見えてけしきもあやなき宿の山のみね
[illegible]

落花

花さそふあらしのにはもしられけりふりしく桜雪としふみ

水邊款冬

わか宿のさとも見えて山吹の花咲かはねての志かふみ

柳風

うちなひくみるの庭の露るより吹風見ゆる青柳乃いと

柳露

風吹はなひく糸を玉のとふむすふもなな青柳の露

まだ見ぬ年の内に春立ける正月朔日に

年のうちよりかすみしもふあらたまるのくるれ

山霞

時しらぬ春も春なる気色にて霞ふうつむ

浦霞

あやなくも隔つる春の霞かな音ハまさりけたえなしの竹

西明光保の家にて人々よみておくる

春の日に思ふともからこゝにきて駿[?]ともおしむつまちかそふ

帰雁

咲そめん花の梢を見すてゝや霞に空に春のかりゆく

岸柳

打なびく緑のいろのうつりては底に映る風見ゆるきしの青柳

款冬

折ませと手にとりそめて山吹の花咲かゝる水の[?]かげふみ

当社百首の中 款冬

山吹の花のいろ香もみえずなる川なみやこゝろ[?]ひたす春のかみなるらん

柳

春風にうちなびく糸のかすまひて川そひ柳春風そふく

花

山さくらまちし日かずをかぞへてもなをまだ花の盛かへてまたるゝ

翫花

たつねきてハいつまでかみむ山桜かすみかくれにさきにほふ花

落花

あかずのみさそひし風のつらさかな朝とくきたる花の梢に

藤

さしのぼるとも見えずはぬるを[illegible]てかゝる藤波の色

野外鶯

鶯もこゑあるさとをもちこめて春をさそふかあなたかすみの

水花

風わたる一重よりかも花もなし氷やとけて流るらん

帰雁

はるかなる雲井の外にかへる事あれはれかき春日に思ひたらん

寄花

よの中にすこしあはれなるは花の色を袖にすゝむるうはかなき

月前梅

咲花の色しるかなる月かけもうたかりてはほふそての梅かな

さしかゝりて月にみゆる枝はさくらのこすゑもうつる袖の梅か

松藤

時しらぬ松にかゝりてさく花の色そゆかしく春のふちなみ

松の雪きえぬみやまの里にしも春をとらしふたゝひふるらし

（古今集ニ ソノトリシレス ラホカタメハ 谷ノ鶯トラモラ）

梅薫風

いろそあれわかぬ其ひはふく風のたよりもさぬよそへの梅かえ

水辺春月

春の夜ハ月のかけふらさへ人も風とやたのむかけもひかりて

花

名所の月かあふぬか船のけふよし野の里なさるゝになれ

花のうち

高根にかゝる雲のさかりの咲にかり園のこすゑに見ほはふ春かも

来むすゝ思ひぬる月も待いてつかへる家路も花に見すれて

またふかておいつ迄や花とならむふんおもひたるひくかつらよはる

咲そめし日をまつ花てみよしのや山はさくるかうつむ志ふる

こよしのやかゝる風に山さくらもに朝のこゝろの志つかなる

人あさき嵐に花のさそはれてあやなく詠め袖をそひつる

さふも猶きえすあれとも花の雪みちのほかも人さは

櫻花をしむかひはつま迄なくて風の人とはなひくらん

所々は花にそへてくもりもよしなくて月のさかりにおもひしに咲そめ

吹まきも山風のあらしなかなと見えて雪とふ梅のまちはもの志つくる

さそふ花散しくたかねにもまかせはちらぬ庭の春風
まちし見し人もきく梢のみならて雪そ桜なりける
とのへやまらとえらり見し花もみ山の雪とふくおろし
みよしのや花の白雲ふくかせに嵐にうすむる峰のつき
見し花の面影のこる梢にも猶わすれしき春の山鳥

試筆

さしのほる朝日まつ里は山の端に霞さえつるたちさわるそら

立春山霞

春の来ぬあけぬれは春のよそほひて霞かゝれる深山つきの山

山家鶯

山里はみなしたしきもあさかすみちる花の谷のうくひす

野鶯

さわらひもまたことしえをあかね野へにいてともかくもすまひ鶯のこゑ

関路花

こえかゝるつゝさかりは道に花にさへ立とまられけりあふさかのせき

三月のつきは名のみ遠く楠しける白子乃
萩もやまてもあらし

やまとの名のこりはあらぬ春なれは玄宗の宮殿の花とこそみれ

高砂の名をとめの別葉すてゝ人をみよしなるに

庭上花

霞の春ておかの桜のとりわけむら紅葉のへしられ花その

高砂の春あり一枝やとりて折へしとま見られをしみて

中々に一枝やとりてたれ家あらね見られ家ちかきにつて

花五十首よみける中

立かへり雲をつくしさそはて見るくすくなき花の木かさと

よしの山いくよの春をかさねきてやへにほふなる花のにほひかん

桜花ゆきさきなくまよひても咲ちるかな　庭の梅のな
香よりも先咲　花めてよし此山の根にうつる　花の白雲
よし野山峯にもをふも　白雲　此かへるや花のさかりなん
春の日をこなへきぬとは山ほとて　花見ぬ人の思ふなるらん
咲花は世と疑ひし窓のあるゝなれはまされぬ花をといてちりちる
さのこて花見るよりいとしくいる　影をうつし春のつき影
おくれ咲花をわれ山への桜花　うたひにはふかくとそれはくれ風
峯の花おくれて咲る一本に二ともなはぬ花の家此やたかせ
風きけはさまく梅の花よりもわかぬ心そましてうらし
きこしかて此寄とは花も桜花梅ならし見るよし山との郷
詩人は首つれもせて桜さくらちるをとふれすことわりし
咲花をわかぬまよつこひておのれとちらに枝のうらひす
ちるものにすれかなと嵐よりさかりとれかとも見んし峯の白雲

落花

花とみてしら雲かゝる山ふかく　ふけぬ雪ふる嵐そふく

見花

桜花見ぬ人のゆくはゆきても見しはやまふも山まかせと

天下なる人の面そ前まかりなる盛花

さ花しより前もわかしとおさなふさるて見て峯をかさるかな

やよひの二十日まり花見に詣人の家々人は侍らて家

よみける　庭の池にをりし春のあかきもみれぬなるらん

立いてしこれをかれてをしあるのとまふも見とゝおる花の木のもと

名所落葉

春さむき雪のわかなつむ人もたなくしに此をみよし野の里

花百首の中に

谷川やはなのふかくし柳も風にまつ咲ちるをそれもちる也

鶯も山さとの戸をあけぬれは花まち出て音をや鳴らん

あひにあひて見えつゝしきのなけれはまとふ人まちえてる庭の初花

山桜つれなかりけるうらみさへとけてうれしき花のした紐

旅なからあす中紀まてに山桜をしむ花なきこのまはなれ

花さそふ風の袖といつかてさへみそむる春は山乃をそ

春ちらし世人つても山桜ちれし日すまつ花さくりかな

さくらは折りてこそみめさくら花ちらはあらしふきすす枝を

山さくら咲けりはなにさとふ出すれはめてこそ見よきうつたなくらん

うくひすや乃し旅路をやなく夕くれの花をねくらにかへるらん

ゆふくれは花を見すてゝかへるさへ人もこそまれやまさくら

かへるさをおもふる山路の花のもとにまのあたりふく春の夕風

鶯のなきふへの花の夕ゆすらなみてもまたれ尋ぬるかな

嵐しいつる月もにほひてもの哀ゝ夕ねる山ふま風そふく

さくら花ちりしく庭の鶯もあとふかくこそひとへともなく

いつともなく峯のあらしはさそへとも花よきのふの庭のさかり

暮春

流くる山の音もたえしとけそめて霞む田井に春やくれゆく

湖上春

たちさる波もみきはにたちかへり春しれきぬる志賀の浦風

山家早春

春きぬと雪の宿も松の戸にたえしかなみやまのかすみかな

早春水

こほりのみとけてもむすへ風さえてすこし春あさき池の井のおもて

池藤

春の池のみきはのふちなみ花かつらみなそこにうつりてやさき

紀後國の人 二月中旬思よみかへるに

秋とこそちきりし一丁の[illegible]路をかへる清ふさもなくさめはしと

三月八日[illegible]巴庵にて人々集りて歌よみ

兼題　雨中三月盡

いつよりも晴る[illegible]春のゆふへやくれぬれと[illegible]のなかめ[illegible]

首夏藤

夏かけて池にさく波たちかへり春のなこりとて松のたよし

春よりも猶そまさるなつ山きしにかゝる藤浪の花

なつかけて[illegible]ふかみしまさかれたる藤浪乃花

庭新樹

花ゆゑの人めはかれて青葉のみしけくなりぬる夏の庭かな

[illegible]青葉のかけもすゝしさに[illegible]庭[illegible]

[illegible]青葉に風まつとなれたる夏の庭の[illegible]

卯花

春[illegible]霞[illegible]なつきたれは[illegible]さける垣ねの卯花

月前郭公

みしか夜のかたふく月をしたひてや鳴[illegible]としらぬほとゝきす

高楼[illegible]夏

見し夢の昔にかへる袖の上にかをる名残ハのきの立花

杜五月雨

わきてみんくもやしけきの五月雨の日数かさなる森の下枝

野夕夏草

さわく人の行来稀なる夕くれハ露こそむすへ野辺の夏草

郭公

忘れぬる夜そをしれる時鳥かきくもりゆくむら雨の空

名所夏月

見る程もすゝしき川の川波によとみてあかるみしかよのつき

暁郭公

浮雲ハ月にひと声鳴すてゝなこりもうすき有明の空

海辺納涼

すゝの江や松吹風も音さえて涼しくよする沖津白波

郭公

待わひてあかねぬる村雨のあとぬれまさるひのゆふくれのこゑ

夜の嵐も月影なかなかに手枕になれりすてゝ郭公なく

浦五月雨

舟よおかる松かくるなる五月雨も久しく浪の須磨のうら

野夕立

吹かへる野の横雲にかゝりて夕たつる風のすゝしき

ゆふ立ハみる空のをさまりて末さへきよき風に雲もとまらす

雨後郭公

五月雨ハさるゝほとにふりいてゝなくこゑもやりぬ村雨のそら

郭公

鳴としもまちなれてすれ初声を聞し後瀬の山のほとゝき

名所夏月

夜の更ハつるとこそ見れハよりさか川なかくて明るなかみの月の影
なるとも見えハ明て見る花も難波のあしも見みし秋の月

六月祓

夏かける禊すゝしきみそき川社かけ行波のしらゆふ

庭瞿麦 夏

ふけひくる風に吹かれ夏なから其の草にも涼し秋の夕花

夕立

なる夏の雲の山の端にも空の露にも涼しかりけり

杜郭公

時過ぬまて杜の梢の木のもとに我のみきゝて鳴郭公

老後郭公

なくきゝし声かよふ夜もかすかにて老の一声
待えても聞わかぬまて老ぬれハ月に聞ゆる声もきこえす

夏月涼

久かたの月のかつらの木の下涼しき影に夏を忘るゝ

郭公

待わひし人にやあるかと里になく一声をとめてなく郭公

むかしの事をおもひてなく声もさらに聞く郭公の声をもきかは
月に今つも夜半の過行くなく声のしらぬ聞く郭公

水辺納涼

かゝる時もすゝしや秋の風にみさきの風の涼しけれ

郭公

待たまに鳴さへとらへてやよしや卯月をハなき初めむ
まかれ月にかくれてなきすてなきつるうらむらくの声乃まち
五月雨の涼しき時鳴のうつりこゝに夏をきゝつるまた
きゝ見てゆうすみて夏たゝしくまちてのこしてはきうの初声かなしく

杜郭公

津らぬ杉杜の若葉にかくてまつ杜鵑もこゝろや夜の一声

郭公

ほとゝきすきゝてそ明ぬる夜の聲のなく一聲とたれつらむ

河螢

宇治川やいさなみかゞり火の影見えて出水の瀬にともす螢かな

渡螢

影見えてあかしはせばしにとぶ螢まよふつゝぬ心なるらし

河螢

なみた川ふかきやみよにまもる瀬を見わたるや夏のみなかみ

なかき川こえぬ思ひのゆりとてなかるゝ瀬にかゞるかゞりかな

山新樹

そられすゞしかすみてもさ夏木立の緑につゞく山の端

江五月雨

五月雨はなくこふる五月雨に入江のあしも波の下葉

夜月涼

蓮葉の露も光やするすしは秋そあさむく夜の月かげ

水辺自秋涼

風渡るいさゝ世の水の音羽川は秋ぞともゆる波のすゞしさ

夕立風

夕立の雲は及ばぬこの里にすゞしさおくる山おろしの風

草間螢

草のはらみだるゝ露の夕ぐれにのこれる影は螢なりけり

閑郭公

あさくきくまつよ心の九重の里はおのがなる声も絶えとまつ夜

ふりぬらん山のあなたはすゞしさものかはるにたまる夕立のあと

納涼

山陰や井手の心つくれたにごさぬ松吹風も袖にかちまさて

立よれば夜ともみえずさ清川ときいれてむすぶ石の白波

ゆふされはまちえたる出る秋風のかよふにまさし枝の下荻

海辺納涼

松の浦や汐みちくるわたつさも是すれなまつむ袖はしらるゝ夕かせ

暁[illegible]

かた海しむかしの鏡も面影もさまかにありつ月のさこ

水上蛍

山の井や影もぬるにみえ影もとられてよる波はとぶ蛍かな

清相川ぶかき思ひの影見えてせき絶えしかはまとふ蛍かな

郭公

恋よしと卯花垣の誰つみてまかせなるらんかへしてまず

むら雨のさのみたてまきてほと過し[illegible]ぬるまてなくなり

[illegible]夜

なつの夜はなく一声をと待るまに明しけるに明ほの

[illegible]樹

咲まじる花なきころぞみえてあまりにしげき木末に夏の西影

卯花

照月もかくれぬ垣ねの木のもとに影をうつして咲る卯花

夕立

ふりぬる雲中てらす日影みえてすゞしく見ゆる夕立のあと

石に[illegible]

うちしめり其の声のかたる年ふるさとの軒の立花

郭公

かくちる花ハ暮るゝ待見てもゆかしき花かけの一夜

待郭公

さゆみなくまつ人すれと時鳥忍ひの一声ハなきやわすれん

雨中郭公

五月雨の雲のうき橋かゝりなく声もきこえぬ時鳥かな

郭公

過りゆく声ハなかなか月のころにはなの名鳴かくなる

螢

夕風の露吹はらふ草むらにぬれし影見えやほたるなるらん

河螢

よるよるも思ひさそれて天をとふ初瀬の川にとふほたるかな

谷螢

谷川や夜の光もとなるそてをるれハ波にもとふほたる　如郁

上

螢

やみふかき思ひありその光をまつ波にまよひてとふほたるかな

納涼

ふく風になひく末葉もすゝしさにむかひかゝる松のかけ　篠か

夏夜月　扇

みそき川波の白ゆふ打かけてかへるたもとに風そすゝしき

川なみのなかれてはやく夜の日もともふるかな月のみそきと思ゆる

郭公

時鳥波よりみゆや有明の月になく声のかゝる夜半哉

河螢

やみふかきいたぬおもひの水のうへてものうきほたる井手の玉川

天の川ゝちふかきをたなはた思ひとゝまりてそ見ん

江螢

難波へ行雛波のあしに秋来すゝふおとろしかりえるはとの雲の末

夜月　初秋

きつふかに秋とう円してまた境ほしくすめるまとの月影

秋上庵

おもせハみつるとすれ水の井ふ見るか夢あるすゝめかるゝふ

蓮

波ちよ文学のやうて流てまハちりもせとりてや見るし葉の露

大丈　玉川の蔵れ宿所まし見せられるとみて

葉ふき青葉の玉乃粒くかひりもそれてはふかるゝふ

和泉国堺の東そのあたりの八条の野ふ芦庵里篭

いきのせぬよるもおしやの里ちかくいそんまとしてめかるゝふ

初秋

秋ふきて庭の木れあつれきさもかの紗袋き初る三ヶ日の影

夏かへぬ花蕨の山をふく風ハおおしみてめて秋ハきふれり

初秋

をとふれつ須ふ夏を吹かへてけさハ身ふも秋のきつゝをせ

むさし野家の物まりや涼暮の里までの秋の初風

七夕

たちくれかへるあしさハ天の川まてぬさ祀や恋しかるらん

萩風

出しやる埜山の秋のおのれまて影招ねかすふ萩のさハ風

雲井苦の苑

ちれそむる柳きその風ふあらの見えてなひくさと薪の旅れの秋雲

月

吹まよふ雲をも月のかつらにて嵐にそむる紅葉なりけれ

秋の月たゝあくかれしなからひとりなもそらに人さそふらん

擣衣

源氏秋の宮をとかさねて白妙の衣うつなり

野原

今そとふ神の宮にあさちふきしけれ

萩

秋風に立野の原の露のすゝきにそ

好色

落葉

ゆかりなき浅ちの宿に

山家

よし野山きつゝ見るにはなれも

露草花

ふかきみのゝ

月前虫

秋の夜の月の

夕露

秋の夜の月のひかりもむしの音も

ゆふしくれ

閏月七夕

天の川後ある月をあふせとはなと七夕のちきりなるらん

麻夢夜友

うきことのねさめのともをたのむかなまくらにちかき山のさひしき夜

名所月

あまの原もはれていなみのゝ山の端の月影清し峯の松か枝

野分

吹まよふかせもこたへて萩むらに露みたれちる野への秋の夕

ことにふく木下風も秋深くちらぬ露の玉ちるみやきのゝ露

吹まよふ風のけしきをしられつゝ猿もよふね野路のなくしも

深庭萩

秋風の吹と吹しても今ぞなき宿さびし庭の萩かな

八月十五夜

天の原くもらぬよかゝりける雲もなきこの世の秋の夜の月

星樹夜

秋きぬと秋虫のあはれ此音羽山ふもとのさとの夜はつきせぬ

うら風もさそはぬ里人の波の音も秋しき夜半かな

古花秋月

ほか風まさる庭花の露より光あるむさし野の月

七夕夜

秋風に天の川せの夜ふけゆかへしうちみかさなるきぬぬれたる

故郷月

ふりにける家を思ひしと鶴そてにくゝやどるふるさとの月

のきもあれしあはれも何くねもら故郷のすみかの月

むかしは池もなつかしきかのみすみのちるまて

浦月

さえりつるもとかもたしてしほかせのうらみしもなき月の影

夕麻

夕されは月まつ窓に出なりしかといつるさへなほしのはるゝ

萩

おく露も今をさかりと秋はきの枝もとをゝにむすふ秋哉

松間月

吹はらふ木の間ゝりきえ月影もおちてさはらぬ庭のまつ風

虫

秋風にみたれて萩やおもふらんむしのなくねのまつむしのこゑ

月前鹿

影すめる月をかゝみのわかしかて鹿の妻こふ山のをのれ

妻乞ふてむすふ山の秋風にて袖ぬるゝ鹿の月影

月のうへ

露しけき秋の月影もかくやさ萩のなかにまよふ

時しらぬ山しをいつれも月は秋なるひかりなりけり

すゝか川八十瀬の浪乃音ふけて山鳩ちかくつきそなりぬ風

あれまさる板間の月の影すみて宿るは月に露も涙

田家擣衣

風寒み小田の庵をとふ人もなく衣うつなん

萩の花宿をかりて人は流るゝうきよそ

打侘てかたまりぬる今宵みし秋萩の花

九月十三夜歌合の中秋風

秋きぬと告る初鴈の夕風にやとてふく空のおきつかふ

田川落葉

山風にまかせて紅葉しきれと峰るさとのさ川の紅葉しけり

旧秋猿

はゝしく流る此猿も八月の影を愚まつる此れ悲て

草花露

花の色におもひ乱るゝ露もうつろひて夕咲そふ野への秋草

庭草秋

なるさへ八秋よりまさる人もなし咲そふ濃き庭の秋萩

萩

咲く萩も今をさかりと秋の花の枝もたわゝにむすふ野への露

野萩錦の間尾花秋

時過てやあすハちりなん秋の夕日をさそふ宿の花くれ

月前擣衣

袖のうへにうつる光も更ゆくの衣うつなり月の夜すからの

野草花

秋ハ秋の花のみ花の中路そひともし 志るゝ野への色をそふ哉

分ゆけハまねくまつけて秋の野の尾花の袖ハ露もこほれし

河月

名の雲に花てたれかやかつら川光よわたりて月のなかるゝ

夜擣衣

秋深く山ハなかなかみれ嵐にも夜さへしるや衣うつ音

野月

旅風よ露もこほれてぬきとめぬ玉のよこ野の萩ハの月影

半はきても野やとてらぬ野への月ちと花の袖に影ふりまかり

紅葉

木葉まてのこらぬ野よ山の名たかりけるおとしる露もしほれそ

山紅葉

たかま山君なく時雨しくれして人をいれたく峯のもみち葉

半夜百草の中 野草花

秋萩の花すり衣まきけれぬ人も野への色をまかりあ

打わたる秋のなかばもすぎてこそくもらぬ月を見るらん

旧草花露

女郎花秋乃さかりの夕露もさこそ色にてやおくらん

旧擣衣

袖の露思ひいれてもすみなれしむかしの衣うつらん

湖辺霧

うすくこく湖の白露染かけて錦おりなすさゝれ水紫

浦しまる積る湖の志ら露と立かくも染る岸のもみち葉

河辺月

あすか川くりみえかくし立田川さしせもかゝる秋のあきかせ

月

むかしみし月のかつらも染ぬらし時雨のかさね一しほ

暮秋

くもかつらつゆ秋の名残よまし見かけゆる歌人のゆふつゆ

秋のうく

秋の暮八重くふとしの夜なかく新てふさこし秋の上風

あきふかく志るき枝をつれなくて志つくふもる松の下風

月

雲たちふ秋風のあらしまよひ入月のかつらも花そちりそふ

江月

秋もすゞし浪よせ江の岩まよせて月影やある秋のうら風

月前虫

小倉山夕月の光も身にしみて虫の音すめる野辺の秋かせ

虫

庭のあれ木陰とくふき浅ちふに月ゆかむしの声そさやけき

中〳〵にわかれの夜たゝよりもかへてつらきは夜乃袂にまき
えふのゝさやけき気とそ見し袂に袖をさなからも月まで成けり

羇旅

〔今はとて立別れし旅衣をほさやとふさとやかに見え
草月の二海林底海の名をけりるを吹てよめる
ふなしさゝに秋や人のむかしやまで思ひかけける袖の露なき

海邊旅泊　寄水懐旧

さらにふ又むかしよかへる洞川なき人こふる涙たもとてハかり糸

林底海邊泊　海風懐旧

なき人をおもふ乃ふる家もなみをそへて袖ふきしをるのきハ松風

旅露

心ありきを花の袖もつしあらぬ秋のさかりのつゆは身にしみ〕

紅葉

古田姫人の人の秋にあふ身けての後の末をも思ひみたれて

野雲

秋ぞ萩の花の小しをれをかしゝにたちかくしつれへの夕暮

月前草花

露したけしてに花の波まよつ流ひて月影さわく野への秋風

秋の山家よめる

家路も見えそめぬるまも見えなひて初葉にはしる秋の山松

月前友

疎りしとも今さらに語らん情あらん友待かし山の端の月

月

風ふけハそら〳〵し露をも玉乃浦と出えをむなしく月をもちな

野月

昔にも経にし旅乃秋をへて露ふかき草の野への月かけ

夜虫

いそ松りぬ奈陰の浅ちふに月結むしし虫紙つくしらん

なふむし此霜の方ねふも夜や声きき鳴音をこそ庭の松虫

山紅葉

ゆふしくれもれり峯のもみち葉を今ハしれとさす入日かな

秋夕

ゆふ暮れんなき身も霜かるなりしれあやしき秋の袖かな

猿月

友とこそおもひしかとも月こそ猿の友となりけれ

七夕

天の川なかれてはやき月日ともわれのあふせにまちやわふらん

たなはたはまちくるいまや秋とへて敷妙あひみらしむらん

かけてやる思ひの程を天の川わたるみち此をしやこそしるらん

虫

志のふ声浅ちか末に此きりきりすいつれか先に鳴かんとすらん

月前萩花

秋の野の花にも霜はおりて萩の花とひかりをとらへ月の影

夜庭

鳴とひきて身ハなきハ此枕ともまくらふかきまさきの声

夜擣衣

なかいふこゆめハこえぬ衣さむしやまのはらんあさのさむさに

初秋

秋きぬとさすか池のふしやきれともやさらさちるあけさの白露

露

夕虫

よけゆけハ詠してそ見ゆるまし咲たてる野への花の波の音ひち

それゆゑもかのうたまし鳴虫もちくさにかゝる野へのむしの声

霧

みなせ川秋なふかめてしろ霧もたえてゆくせの音はしてけれ

山月

たちこえて橋山も秋の夜乃月すみのぼる峯にそ見る

菊

けさ見ればうつろひそめてたくしもにほひもはて奴庭の白菊

秋山

立田山りみちもすきさたくて一むらかゝる峯の志ら雲

月前葛

ふくる夜の月ふきかへせすきまさる月もむかしくれたゝほそうな風

松間月

かりそめの松の下庵りねかみかくすふゝすめる秋乃秋のつき

おはの松こす窓の影もねやちかくさしいるは八の月のさやけさ

夕庵

それふかき霧ふく野への夕風にみたれて志かのつまやこふらん

山月

遠かとみえてさやけく山高みをとりへ乃すめる秋の夜の月

初秋露

山風のはらふるもまさて秋きぬて今朝志ら露のふかき萩

月前萩花

志ら露の玉のをとすききよるは又月もひかりはすもひたへ浅

夕虫

いつはとはおもひとは秋そ夕月夜さなやとかへのまつむしの声

夜々月

あかし夜ハ志のふる月をみるさひの影の並深の家たし前ゆて
ひとかけハ見てハいせにもなくよなかたまみもる秋の夜の月

月前松

さやかなる月よみる影ハ秋も又今一しほの松のいろかな
影の松見てあかよ夜将まてけやうつし庭の月影

夕月

まてこれをいつこともおもし名のみと鳴てそれなれ秋のかゝる

雪中雁

たつ雲をつまとふかのかなきまて何ハ雁もふかくかなしかなくに

月前擣衣

たてふしも似るよのかる夜をよりてそたの月影に衣うちなん

名所紅葉

いかなんるなへし志るれの雨しからうつきの山のみさのもみち葉

九月十三夜

あなのみは後のこひをさそるをふかるハなてき長月の影
月の前三十首よみにけり

秋の夜を外にいろおつるなしこれを秋にやとる月まとハや
さやかなる月をなにかつ雑なりくものさきおハ風をたふハて
はるむけれかるよりてんよかるかたりよりすぐれをれとそとむ

夜雁

夜かいそくむつきなれやかりの夜をさへうけてそよきかな

野菊

世さて晩の菊ハみたにうつたく霜よかれても白ふ菊のうすと

夜一

くるかるをこともえてて鳴のたちなちつく夜半の初厂

八月十五夜当座に阿上一月字

秋の夜ハさえたる影もせき入て高瀬の川に月をとゝそなかれ
影うつる清瀧川の秋風に月をも出て流るなるらん

聞鹿

深山まてたまさかこその通ひ路鹿たてなをしり鳴なりさしみ秋
なまいそ夢やむすふん花すゝきむれ立野辺にさとしらぬ鹿あり

秋夕

さひしさハそこともなくて出立てあてたく秋まかせゆくへの空

帰月

大江山雲もかゝらぬ月影にまよひもいく野の道のあきれたひ哉

杜紅葉

千年まて染る日数もかさなりてもおなしならしの杜の紅葉か

九月尽

行かハとまらて秋の名残をも惜ぬへしおとふる袖の中の露

山路秋行

わけふかく奥ふかみちの秋の紅葉をそこしらんとゆく山路かな

笹虫

かくとなき笹のまかきふく風のあはれこの夜するむし竹夜哉

山月

秋の夜も光を花と此山さくらの枝にちらんつきこの松

閑月

あやなるかつらの影も秋の夜ハ松にたのひさしのひとつ月

月前松

よるまて月の光をうつしかはてるめる色もぬいそれ此松の枝

里擣衣

音たかくふしゝはさとも名のしして衣うつ夜を露ともしさた

初冬時雨

めぐみえて露も笑しくみえきぬとあらしをけしくふる時雨かな
かまへぬふすゝの里はさゝ時雨山端よりや冬はきぬらん

風前落葉

みわの社ハあらし吹しくたつた山峯の木葉や海にちるらん

十二月十五日於太平宅臨時會小野當

ふし比まよたてまてけさハあらかりつる君をまてなきむさしの京

夕時雨

山端はきえ行雲の晴日にかけさすや暮へハ折しも晴て
ちらつきふりくるをの空あかれて剥しく入れの繞

落葉隨風

風をやみちて一むらふかき里ハしてちりもとまらぬ峯の紅葉て
はそのかなでも志ろくして吹下すふあらし其あたり峯のもみちか

夜雪

呉竹の葉ふかく枝にかゝる雪ふ音もたゆるとなしのこゑ

冬暁月

こし秋乃おもかけをとゝめかねて月のみのこるまとのあけかた

杜雪

花紅葉うつはかたる折ふしも常紀の杜の本にしつる雪

常しかふこまやからの枝たのむ人老曽の杜にふれる白雪

雨後落葉

そめして今は千入のもみち重を雨おもしにちる紅葉ば

路雪

白雪乃ふるかふあるのなかしえまとはゞ道も見えぬはかりに

深雪

ふりつもる山雪ふかきをいくへの山のかけちあとたえにけり

池氷

ぬまのこゑるかゝみはよるすてさし嵐のおとそ見えける

よあれ

十月晦日賀茂大人の十三回忌ありけれは忌日にして

十年あまりの夢かたり林の葉音のみきゝても袖のぬるゝなに

落葉

山風を紅葉てみゆるなかれのみちのまかてちる紅葉

古寺雪

香煙みえきによかきはかれてかすかうつりぬる雪の庭さま

雨後冬月

風さむし秋の時雨ふふきとふけは板間の月もりくる

庭上雪

清まりて八重も朝その白妙のまけるゝ宿とは見えぬ雪のふるまふ

河落葉

紅の木葉うかひて深川や名もなかれし神無月かな

師竜菜

見し秋のなこりはかれて霜露の紅の原そ言とへみなる

初冬時雨

たちかへり今もふりきそ冬きぬと告しらせつる時雨なるらん

河落葉

山風に木葉しくれて立田川岩こえ流るかこしも名ふりけり

夜時雨

うき雲のかゝりはそれて月影も板屋とりゐるむら時雨かな

たとへうす衣をぬらしこれのそれぬて袖の露ぬらす袖かな

山家時雨

ふりめくる山家斯縄も柴の戸は志もしたしもらしこれは

野露

ふゆされは露は紀のふゆとかなりゆて霜こそむすへむさしの原

たかけりし葉は跡なく名そされて霜ふくまる野人の夜もち

寒草

おなおもてあの人みえを花の袖の露たえぬ日てや名かれぬらん

風前落葉

吹わたる嵐の梢もたえきて紅ふかき木の葉かなし

こはさされ比風のたよりとさそふらんすもうらに嵐の紅葉

羇中雪

打はれてこのむらつねの山松もまひや雪の下かれのかり

詠ふけし夜の嵐の露かなしかた今照あらむ雪の跡へ

分まよふ旅の行き白雪比ゆる末に人やまよはん

雪ふかく流るる旅跡をふみさそふ嵐らもけりまそたかき

枯野

冬されハ霜よりかりて秋の色ハ露とのこれとかれし野へハ

庭上霰

聲すなり枯の梢やふ落しそて落またぬ玉わられ

松のやふりやあられの音きけハ袖も袖り玉そみゆる

風前落葉

吹とゆむ雨も志ふれて落葉ちる嵐の名そふきぬる

千鳥

あの浦ハ浪もたちそのうら風にむれゐる千鳥夜さむなる

寒村雪

りうかはなひくハ見えて雪ふりつもれるそし里ハ雪もふる

寒夜百その中枯野月

霜こほる尾花よさえて月影をうつれハかれる冬の野への下

残菊

さかぬはつかふ秋のかたみとのこしおく霜のまかきよハ志らきくの色

枯野

うらさひても秋ハかれて花く霜におのれ枯ゆく野への人も

冬されハ霜をもちひて消残る野のせの霜れ玉のをすすき

寒蘆

かふきまや あれハ霜のよそにみえん年ふる蘆かもの志たを

冬の池

さえまくれぬ楫の音もしあらなきのふ吹く志らかきに松の木かし

時雨

冬よりもあるかと見えぬ神無月松の時雨の音ハきたれける

忘れゆくかひしれかたきにいう里人うちつれてぬらすらん

ほともなくゆく松の梢や乃むりくる時雨きこしハ笛たうきねの手枕

池水鳥

池水のこほる波にうかへる夕霧さむく夜半のあらしも

寒草

霜深くやどり乱れて霜のみさびしき庭の荻原

田家雪

去年の秋のこのもかのもを志つゝ門田に積る白雪

落葉

山かけの深しおのれて八重に道時雨てふる木葉かな

ふきおくるあらしに渡てふみちれぬ山の谷の岩の紅葉

寒草

霜とつる野の枯のこきえて見えし霜ものこらぬ野への草

庭雪

清きや庭もさえつゝ降そめて雪も夜ふる庭の家及さ

行路雪

中々にゆきまの人の跡見えて雪にたどらぬ野への通ひち

初冬霜

秋くれし夜の霜さへ乾ぬに霜をむすふ一夜ひとよに

松雪

ふりつもる雪にしも岩根の木もうつりし峯の松かえ

ふりそむる此比は中々色そへてみとりそふ雪の松か枝

旅宿雪

旅のこゝろ打解られて見えすふ見しふもあらぬ雪の夜な

時雨

おとろはねやの板間に月さして音も跡なき時雨かな

落葉

さそひくる嵐にさそはれて枕のうへにつもる木の葉よ及つきふれり

初雪

見なれこし落葉の庭にかゝるあめのしきはきのまつの音

時雨

落葉ふきちれゆくへもしられてたえまにこゝろさそはれ嵐の花

河落葉

河よ川おすへおちてはよみにさやかでも波のまゝみちなし

寒草

一さかりすこての後は霜にまよひきしめ見えけるをとみたへしに

冬月

こほりしは月のかつらにみちて葉もちりてや庭のをはさびしき

千鳥

志賀のうらや寄るさよなかにさそふ波の涼しさよ千鳥

水鳥

ふゆかれのあし間ならぬたちにしてあをそ羽色かよふ池の鳥

炉火

たきすみにおこしてもおく霜のふかき夜さむしねやの埋火

山家歳暮

くれてこそ年のゆくへもしらるれ山路は雪にとぢこむるものには

夜半時雨

ねさめとあはれしるかもめさめてなかふりすさむしくれかは

ふりしきる志のぶ山かぜのおとみてもさびしむ時雨

雨後落葉

おのがまゝふりそふ袖のはれて今そちりしかそたのむ落葉

十月八日山家實弘の江戸へ下るによみてまゐらする

たれもさぞなつかしきものなかれてはふるさとへかへる夜あつまちよりそ

夜時雨

とりかゝる月の光もさためなきねやにしくるゝの音よしくれかな

しられよのこゝろ わすらるゝ身よりもつらき知名ぞ見せけれ

惜暮秋

立帰る春はあれども年波のこえんはおしき秋のわかれや

十月の末つかた楓染りてやまとへ

散のこる梢またあはれ楓はけりはさそふる庭の紅葉は

紅葉猶枝

木の葉ちるかへらず松の下紅葉こそ道も佐保姫しのこる一枝

春院上臈

花のやとはなれ枝に咲てみえて春も見るちかき梅乃中垣

七里路要かゝらぬあつさすれるよ

手代ふとも君とは見えし黒髪を流るかしらの雪をかさねて

恋のうた

寄しられがた思ひの袖のみなかにゆふもはてよそはかりぬらし

ひとへきりのまかきなつかしはまた逢ひ思ひそゆく方もなき

なをさせし袖もいつしかくちなむ乃みのやしなはで下こかれつゝ

寄雨恋

さはかりんと思ふ心もかなはずて袖にかゝれるもひのむら雨

寄里恋

あまはてしうつれ床よ今夜はひとりねのさむしろ

寄河恋

いつも川はなこしおとおりふしもとわき涙も袖にぬれけり

逢見る思ひのふちよ飛鳥川たえとかはふせぜかたる庭さるらん

暮恋

たつぬれど逢はて月日も秋の川ましも志ずれてなきちきりかな

春恋

恋すれハ中々つれし春の花鳥もおもひをそふるつまとなりつゝ

君もまつきてねさめハれとえハ恋しかな今ハ人のまつらさ

寄枕恋

夢にても見しをたのミのよるしにきるめそかぬる閨乃手枕

ちりかゝぬ涙ひとりねの袖さえに流まゝ乃なつけ乃小枕

約恋

りおもむかなくも志らて世をすて姓ハ菓のゆくりか袖露を結める

寄月恋

うきなからその面影にかよふやとなかむる月もかなしかりしに

寄木恋

涙にあまつれなく見ゆるときも木をかえぬ心と流涙す

寄草恋

寄深く結ふ契りもあさち原かりそめ人にいふかひもなし

逢久恋

あひきとも見つともいはて忍ひにし難波の事もむかしなりけり

忘恋

忘れしも人に忘のふかう庭のあ名ハつかひ見るめをかくすらん

別恋

人もあハむ後の世ハとも鳴鳥の声にやかゝるし志乃ゝめのそら

寄萩花恋

ちる花の春ハたえる乃それなりて袖の色をしなきわかの身

恨恋

吹かたる人の心の秋風に衣のすそハうらみ顔まれて

寄月恋

秋の夜ハ月と涙にくれなるもさや見えぬ夜ひとよの面かけ

寄烟恋

うき人はなほひくしほれ夕けふりなひくもよそのすまの浦風

寄原恋

今ハたやおもひもたえき雨ふれは夜なかゝらすも乱れかや原

寄草恋

それそとハおもふそいてゝしのすゝきはよそにちる露

寄衣恋

かゝあひのやしほの衣なほ深くかくうき人を思ひたえなん

寄月恋

袖のうへに契りね影をやとしきてなほむつましき有明の月

しのふれとたえてやとる月影にあらはれぬへき袖の露かな

寄雲恋

契りこそおもひぬるまもきえん数の契りにむすひもおなし峯の白雲

恋

誰思ふみえる袖の涙とてしのふあまりの人にかくすや

忍恋

かくとたにいはてしのふの衣みなを家よ袖やくちなむ

祈恋

かけてのみ祈るしるしもなきこひに身のうきそれ杜の玉かつら

あふ事ハ祈りし雲のかけていのりし神さへうらき

逢不遇恋

おとにきくとさくら京のかの杭ひと契ハかりよかれぬへしとは

あひ見しもはかなき夢の世をうしそはきえ今はかつもゆる

寄川恋

たゝしまなのし若狭の川のよかなる人の見えしもするか

寄烟恋

きくほとて思ひのたよりしらせばやなひくぬ中ふくゆのうらふへきて
こひしなん後もおもひのやのこらばあふよるなき烟なりとも
ものいへばきえ果ぬのりとわれとあさきハなにひぬ人と気しやうへん
あなかしこけふまでたもちし思ひのふりしめかもたえなん
玉のをよかけけるをと見てもしれみなへもなほ思ひあかりとハ

結恋

ちぎりおきてこぬ秋ハうらみもこゑ夜のをんすると思ひけるかや

半夜聞鶏初恋

きのふまで思ひそめけるたもとかな秋風こそ恋と織るものは

問久恋

年をへて契し人もかくはかりたのむ心とつまなかりけり

旧後恋

たしなき井も千年まで年まきハあふよ人さる命なりけり

恨恋

誰秋よあはぬままに人の心風もうき人ハ秋よりさきにかはらん

掃恋

はかなしやたゆぬちぎりも結ぶるあふせハ水れの中川の水

夢火恋

こぬ人のそなたを夢にはかなくも思ひこがれて待とつけなせ
うきひとの秋まで消れし身ハすむし

寄雲恋

高天の山よそふへてうつる鏡こそかけ風をまたなき夜乃うきこゝも

半夜百首の中無恋

いふせむ夜のふかき夜のたのりもそへてつもる思ひ我あまるなみだ哉

閏逢恋

涙ゆへてつれなかりつるむかしのやさ長くともちぎる物ハそうらしき

旧契恋

きぬ〳〵に袖のなミたもかハかして忘られかりしのゝめそふ

旧後朝恋

見し昨のかゞミの月ハ影かハりて袖まのこゝろ寄もなかなし

旧涙恋

ひまも涙しくるゝともまひかかハらて見ぬ中川の水

旧寄虫恋

涙なる人やくるとはかまのいそまたのこゝハおもかけの鄙

逢恋

我逢かハ人のやみのゆめとて夢とやなかんさよそれたつのか

閨恋

ふく風のき夢つゝいかすそかこちたれ覚たるまのねかすかん

涙恋

おもふ身の今ハなミたにむかつて涙てもなくね秋や夢かな

こゝろのそハかれし袖のもすそのこゝろなるまゝに寄乃玉のを

疑恋

いかにして人の心たのみかせ川ちかふにうきせなりてゆくやと

忠恋

我しらし涙に人めをもる色の言葉たえて涙てかひなき

涙恋

逢ぬまも忘てなかれたて柾何面影のたちのこさん

寄山恋

夢に高あかね高めしおもつの山ら秋のかしかりを何とかん

不逢恋

はかなしやきみのたよれあすりかもくらふへかれ夢とこにえん

逢後増恋

又さらにまさる思ひやましてすゝかへぬ名のむくひなれハ
夜かつら痕かくへきたよりにふれて詠なき露の下草
淡恵
等思西人恵
こゝしまん纒の末を二つにおもひこふれて立やまよハゞ
露 昊恵
まひふれもまことなりし昔頭の名かくるゝ身ならさも是非に而
君恵
人めのみかれ所の身あたかに秋葉の名ぬ後ハいふまひもなし
去られしかしたひて此まゝ申したる又まやいてむ所を思ひハ
三月八日名児屋舜律まて人々集りて発句よみ
ける時 寄旅會
又とこゝにちきりあるのすハなしいふうらみ字なけのかなしき花も

同 遅桜
ちり尽る昔にまさりてみしものおくれてさけ花をとまつ
葉をけ給ふかつらしもまふかしたえれて君かふ色の後の花
梅恵
君の跡の茶のたつ事にかてりつまつはしそもある所思ふ
近恵
いふにせしまちかききかひもなつ塩ふか源の清ふちてさて
家河恵
松川やたなきこりつむ年を重ねいつの人れかハなりなれける
淡恵
あさまらハ家つとの川波よむ道めぐる鴨の高えなかれ
不遂恵
いふたむ何とれしふそ岩代の里まひて寄る松のつれなき

君代の昔乃かゝ糸もたえぬとは思ひし世をとふかな

待恋

こぬ人をまつの木末乃中に明ぬかひなき今宵の袖ハぬれけれ

逢恋

世をかへて逢ふ数をもけふの法をこえしはとのしるへの思ひけん

久忍恋

こよひまちしとえらなき忍ふのかくる新増みちのくの糸

被忘恋

忘そまつはるし措きわすれ草のまゝ人ことおもひぬるかな

寄衣恋

あはれてふをふかけよ夜衣さまそハうすきこそ辛なりけれ

逢不遇恋

ちきりしへを孫てかき逢てかことこりん空めしもあはぬ夢の手枕

おもひ見し一夜の夢のちきりにて人をうらむる中そかなしき

寄虫恋

信夫の糸けたのみともいひかてておもひこえぬるやはたれ久しき

寄河恋

千の床乃きしねとなかふ思ひ川かられても逢せある世に

寄弓恋

人をいかてあつさ弓ゆるすあつさま弓よ猶や八すれをすれぬちきりハ

稀逢恋

こひしてもそふちきり花の花わり来られたりくちさらは世を

逢不遇恋

はかなしやまの夜をかへしても見ぬうつゝ夢のなごりをそ

思恋

あのすき袖の袖のこたひふそれておいてぬことをすれ

はかいなき思ひは葉の袖に露のきえぬを恋のちをとすすき

寄琴恋

かきたてて見れをいはぬつま琴はさうかなる風に吹かよふらん

寄鏡恋

ますみ鏡かけても影となりまよひうつるはかなる人のつらさを

寄花庭

みよしのの山かすみしそれの花の色も風のたよりもあらてふ物を

寄霧庭

結ひおきし籬なかき霧に秋風の思ひこそまし袖は露に

旅橋

かけてみし思ひわたしと旅人のふみをかよはぬ天のうきたて

閑居月

物思ひふかきみてんをやりれ夜月まよふ人もなし

行路尋友

それ行も君をやあともちまよふ千年かぬ雁をありて

羈中関

越ておもふまてはしし秋風もふくを秋はあの関の世なし

山家水

岩の戸も払すみすまき八世をいとふ人やあさゆく山の井は水

旅宿船

おもかはる物思の身人のさすらふ旅の露のうかひの

旅にを見ても見すかりたれみ名も末くも旅人の秋風

山家風

きゝなれてうしと思ひしのきれすむ心も都にも此山さとの庵

山家

月やあらぬゆかりも人やなからむ家すむ山乃影清松かえ

旅宿

夢のまくらとひとやみんやこ人ちきりし月まちかふおもかけ

松下水

風かよふ木末もそことふしつゝひて涼しさ見せる松の下かけ

旅

旅宿夢

風さむくさそふ客のかり枕故郷の夢もむすひかね清し

よるも猶かよふ夢路にうきたひ旅のあしもやすめぬかりの枕に

擬宛鴻時含歯庭に　君恩如海

たてまつ波立ても君て紀の海乃深き恵みをこそ知れやする

前此おしきふしを見ひて

おろかなる心を猶のことせた八花も春まて名に流なし

何る人の於楽契松齢

万代に君もさかえて年高き名をなつくよ都の松か枝

古より記伝りきあまたよくれはその心み代中なる

神の名人の名を数まて人に家よる世すふよ倭武尊

やゝひらもとりみもゆく〜のむかしのいつことをとちと読ぶのまゝ

旅泊

うき風よかふ都の中め路まて詠るき波のうきまくらの東

京への都りをるにむくしりとまて西のみやけまへ八

尋くりといかるをかくして

鈴鹿山いつれるたふんそ越とちてそこを見てぬ西の夕流

ある人の一周忌をとひけるによみてつかはしける
さえつる心のやみに迷ひ来し月と花かと於とふらん

文化三寅年三月得尾張人植松有信本
令浅囯某写之矣
白菅人藤麁園主人
文化四丁卯年正月二十七日新居人高須元尚写之